石川支部報

第110号
発行者
退職校長会石川支部
冨岡高春

人生百年時代に向けて
～ささやかな取り組み～

副支部長　大樂宣和

日々特段に変化のない穏やかな生活を送っているが、人生百年時代を意識して最近取り組んでいる事がある。

一つは「終活」である。先祖代々からの、庭の古木の背が高くなり手入れが困難になってしまったので、思いきって伐採した。子供の頃からの思い出があり、簡単には割り切れず、いざとなると難しいものであった。今後は家屋の解体等が残っている。これは古木以上に困難が予想される。

二つ目は、「健康維持」である。後期高齢者の仲間入りが目前に迫り、健康が大きな課題になっている。私の求める健康は、いつでも好きな事ができ、自分の足で好きな所へ出かけ見聞を広め、好きなものが食べられる事である。そこで人生の後半を充実させたいという考えから始めたのがウォーキングである。ほぼ毎日五千歩、約五十分を目標に歩いている。おかげで体脂肪は平均以下で自己満足している。今後も健康を求めて無理のない範囲で歩きたい。

三つ目は、「脳活」である。最近漢字は忘れる、計算速度は遅くなる、人の名前は出ないなど脳機能の低下が著しい。そこで脳を鍛える目的で、新聞を丁寧に読む、日記をつける等、当たり前の事ではあるが意識して取り組んでいる。その他にクロスワード、計算漢字ドリル等も楽しんでいる。欲張らず楽しむことを大切にしたい。

人生百年時代に向けて、心ときめく生き方ができるよう、何事にも進んで取り組み、ささやかな努力を続けていきたい。

学制一五〇年

渡辺惣吾

十一月二十一日（火）浅川小学校の創立一五〇周年記念式典が開催され、WBC（ワールド・ベースボール・クラシック）で侍ジャパンを優勝に導いた栗山英樹監督による記念講演が行われました。

小学校一～六年生を相手に栗山監督はどんな話をするのか期待とともに、心配な気持ちもありましたが、やはり世界一の監督は違います。壇上から子供たちの中に飛び込み、「好きな食べ物は」「どうやったらホームランを打てるか」「野球とは」など、一年生から六年生の質問に、時には具体的に実演も交えながら丁寧に答えていきます。「緊張する時はどうすればよいか」には、「結果をイメージする」「今できることを考える」「自分を少しだけ褒めてあげる」、また、「仲間のため、だれかのために頑張る姿に人は感動する」など、大人でも考えさせられる話です。

最後に「皆さんの中にはすばらしいものがあり、今できなくても、明日、一年後、数十年後かもしれないが諦めず続ければきっとできる。」と、夢を実現するために努力することの大切さについてふれ、講演を締めくくりました。

「自分を大切にしたい」「毎日の努力が夢を叶える」「人との出会いで人生が変わる」…子供たちの感想にも、監督の思いが伝わっているようです。

一五〇年と言えば、一昨年の九月、天皇皇后両陛下のご臨席の下、東京の国立劇場で開催された「学制一五〇年記念式典」に参加させていただきました。明治五年発布の学制は、「邑に不学の人なく、家に不学の人なく」という言葉で始まります。

式典では天皇陛下より、「時代や社会の変化に対応しつつ、誰一人取り残さず、誰もが自分らしさを大切にしながら学ぶことができ、一人一人の可能性が最大限に引き出される教育の実現に向けた動きが着実に進むことを期待します。」とお言葉を賜りました。私たちへの期待とともに、温かいメッセージです。

これまでの先人の歩みを振り返り、変化の激しいこれからの時代の教育への想いを胸に、子供たちの夢の実現に向けて、歩みを続けていきたいと思います。

過去に目を閉ざすものは現代にも盲目なる
～現職校長との合同研修会～

事務局長　矢吹伸一

令和五年八月十日、退職・現職校長、計三十四名の参加を得て、四年ぶりの合同研修会が開催された。講師は石川町立歴史民俗資料館学芸員の佐原崇彦先生である。演題は「歴史民俗資料館、近時資料調査から～地域の先人、その再評価～」として、一時間のご講演をいただいた。

主に戊辰戦争時に「慶應四戊辰日記」を記した山白石の庄屋、松浦孝右衛門とその孫、松浦勇彌の「名望家」としての活躍・生涯と、中田「妙見神社奉額句集」に読み取れる形見の俳人、三森幹雄の俳諧での活躍をご紹介いただいた。

「名望家」松浦の日記は、慶應四年正月から始まり翌明治二年六月末までの一年半、まさに当地での戊辰戦争、大規模な打ちこわし、また棚倉城を攻略した薩摩兵が筆者宅を訪れたエピソードなど、庄屋の体験記として描かれていて

興味深い。三森幹雄は俳諧への熱意が強く、庄屋は継がず江戸で修行に励み、明治期を代表する明治十二傑投票で正岡子規の次の第三位に列せられていることなど、資料を基にお話いただいた。

幕末から明治にかけて、初代石川村長の吉田光一や石川義塾塾長の森嘉種など数多くの「名望家」が存在したこと、当時の庶民の生活・思考など、石川地方の過去に思いを寄せる貴重な刻となりました。佐原講師のご講演に深く感謝申し上げます。

クラブ活動報告

文化財クラブ

渡邉良一

十一月二十五日、コロナ禍で見合わせていた文化財クラブの「文化財巡り」が四年ぶりに実施されました。あいにく今シーズン一番と思われる寒さと強風でしたが、五名の参加者があり交流、玩味となりました。巡ったのは石川町の文化財。まちなか駐車場にある自由民権運動百周年記念碑や小林和平作の「飛翔親子獅子」、自由民権史跡の重謙屋敷、立ヶ岡の大石地蔵尊・和泉式部供養塔、そして新田の通称石川山にある大貴宮八幡宮、最後に野木沢の小和清水。巡っている最中、参加者それぞれが持つ知識、得意とする分野を伝え合う様子は次第に熱を帯び、興味・関心が高まり、活気ある探究へと変わっていきました。時間の経過や寒さも忘れるほどで、全くの初心者である私も文化財や郷土史の奥深さの入り口に立つことができたかな、と。

書道絵画クラブ

吉田相康

書道絵画クラブは、初心者・経験者を問わず四名で活動しています。今年度は、集まって何かに取り組むのではなく、各個人による創作活動や芸術鑑賞を優先していこうということになりました。

私は、師走の上旬、山間に吹き抜ける風に少し肌寒さを感じながら、初めていわき市にある金澤翔子美術館を訪ねました。入館した瞬間から躍動的な書に度肝を抜かれ、その作品から醸し出される厳かな世界に胸を打たれました。

金澤さんには特に決まった書風はなく、母親の指導で書を始めて以来、独特の感性と筆遣いで多方面に影響を与える書家となっています。驚くのは、自由な書でも基本はしっかり踏まえているという点でした。その土台となったエピソードが、十歳の頃に書いた般若心経の写経だったことが語られていました。母親の厳しい指導に涙を流しながらも、必死で基本点画を繰り返し書き続けたことで、楷書の基本やバランス感覚が無意識に体に染み込み、現在の活躍に至っているのだと思いました。最初に受けた強烈な印象は、金澤さんの祈りにも似たメッセージだったのかもしれません。

ゴルフクラブ

鈴木文雄

令和元年の台風十九号による甚大な被害、さらに、コロナ禍感染拡大防止により、中止を余儀なくされてきました松風会現職・退職合同ゴルフコンペを、十一月二十三日、白河国際カントリークラブで五年ぶりに開催しました。当日は、十一月下旬とは思えぬ暖かさと秋晴れの中、絶好のゴルフ日和となり、心地よい汗を流すことができました。

今回の参加者は、現職の先生方が五名、退職校長会ゴルフクラブ十三名の十八名で、それぞれの組に現職の先生方を入れた三名ずつの六組でプレーをしました。現職の先生方は、若いだけあって飛距離はそうとうなものがありましたが、退職組の方は飛距離で及ばずとも技術で対抗し、白熱したプレーが展開されました。また、プレーしながらの会話に笑顔がはじけ、普段なかなか接することの少ない方との親睦を深めることができました。プレー終了後の表彰式では、順位、アトラクション発表ごとに湧き上がる歓声、お互いの成績をたたえ合うシーンは、合同ゴルフコンペの目的を達成した一場面でもありました。

少子化による学校の統廃合もあり、現職の先生方の参加も少なくなってきていますが、年に一度の開催を継続していきたいと思っています。

園芸・野草クラブ

西牧敏幸

令和五年の園芸野草クラブの研修会は、玉川村就業改善センターで、五月三日（水）に実施されました。

南東北山草会主催「山草展」をクラブ員で鑑賞しました。

春は、芽出し・百花繚乱、四季のうちで一番華やぐ時。草花が春の喜びにあふれているようでした。清楚に咲く、可憐な花が何かを語りかけてくれるようでした。

斑入りの葉をもつ山野草も数多く出品されていました。会員の趣味により展示されているとのこと。納得のある作

クマガイソウ

品でした。また、展示されていた作品は地板によって全体の雰囲気ががらりと変わるそうです。地板であれば薄いもの、卓であれば脚の細いものが基本とのこと。鉢も山野草の葉や花、実など強調して見せたいものと補色関係にある色の鉢を選ぶと印象的な作品になるとのことでした。

長く育てれば風情・風格も加わり、思わずほほえみたくなる花の姿に接し、有意義な研修となりました。

旅行記

川崎真裕

コロナの影響で四年振りに再開した退職校長会の旅行。ベニマル石川店駐車場に集まった十六名の参加者は久しぶりの旅行に昂揚しながらバスに乗り込みました。今回の旅行は「東日本大震災・原発事故から十二年半、浜通りの復興の状況を知る旅」というテーマで今もなお復興途上にある相馬。最初の見学先「相馬中村神社」で参道脇の馬陵公園で運動会の練習をする園児と先生方、それを見守る保護者等を見て安堵し、次の見学先「東日本大震災・原子力災害伝承館」で震災当時の様子や原発事故を映像や展示資料で再認識しつつ館外に広がる土地に少しずつ造成される建物、行き交う工事車両で復興の道のりの遠さを感じました。最後の見学先「震災遺構・浪江町立請戸小学校」では津波の破壊力を見せつけられ、ここから奇跡的に避難できた児童やこの事態を判断し必死に行動した教職員を想像して胸が締め付けられました。現地を訪れ、重いテーマながらも充実した旅行になりました。

哀悼

深谷恒夫先生を偲んで

西牧庸一

深谷先生の突然の訃報に接し、驚きとともにお元気だった頃の姿からは、とても考えられませんでした。三年前ご自宅に高齢者叙勲をお届けにあがった時、玄関先での先生の笑顔が最後になってしまいました。

私は先生には、大原小学校で大変お世話になりました。初めて教頭職についたばかりの私に、学校経営全般にわたりご指導いただきました。未熟だった私を、多方面にわたり補っていただいたことを、今でもありがたく感謝しております。

特にお世話になったのは、私が出勤時交通事故にあった時のことです。真っ先に現場にかけつけ、その対応に当たってくださいました。大変ありがたく心強く感じたものでした。

先生は須釜小学校でご退職されました。その後は町の民生委員の会長を長く勤められ、福祉活動に貢献されました。一方では新聞等への投稿など才筆をふるい、広く社会を見わたし自分なりに感じることを表現する素晴らしい力を持っていた先生でした。退職してもなお社会と関わる先生は私たちの見本でした。心よりご冥福をお祈りします。

佐川善雄先生を偲んで

古藤邦英

先生の訃報を耳にして、一緒に過ごした日々を懐かしく思い出されました。

先生とは石川中学校統合当時からの長く深い付き合いで公私共に大変お世話になりました。この頃、石川中は千人を超すマンモス校で一学年九クラスもありました。一緒に教務部で働いたことが忘れられません。先生はてきぱきと執務をこなされ、達筆で賞状など毛筆でなんなく書かれていたことが印象的でした。

また校長昇任も一緒で、京都・奈良の二度の旅行や退職してからも数々の思い出深い親睦研修旅行時のあの笑顔が今、走馬灯のように思い出されます。

古殿中学校長退職後は、地元の浅川町の教育長を歴任され、元気な姿を見せておられましたが、退任後に歩くことが困難になってきたとの知らせを受けて大変残念に思っておりました。

元気に回復されることを願っていた矢先に逝ってしまわれた先生を偲ばれてなりません。佐川先生、どうか安らかにお眠りください。合掌

佐久間國夫先生を偲んで

渡辺敏幸

佐久間國夫先生の訃報に接し、最初に思い浮かんだことは、「天知る、地知る、我知る、子（なんじ）知る」という『後漢書・楊震伝』に出てくる故事でした。

約三十年前、私は石川小学校で教務を務めていました。その時、教頭先生としてお出でになったのが佐久間先生でした。佐久間先生は、歴史に大変造詣が深く、時々の会話の中では、日本や中国の故事をもとにして、管理職になるための心構えや管理職になってからの心構えを教えてくださいました。冒頭の故事はその一つです。「不正や悪事はいつかは露顕する」という意味ですが、佐久間先生は、この故事を「自分のことは誰かが必ず見ている。人に何かを指摘されないような人間でありたいね」という意味でおっしゃっていました。

いつも穏やかな笑顔で誰に対しても柔らかな物腰で接していた佐久間先生には、たくさんの事を教えていただきました。心から感謝を申し上げます。どうか安らかにお眠りください。合掌

できない理由

玉川村教育長　岡崎寛人

元日の夕方のことでした。少しやり残した仕事があり、私は教育委員会の事務局にいました。用が済んで帰ろうと思ったその時、緊急地震警報が鳴ったのです。テレビをつけると能登半島沖で大規模な地震が発生し、大津波警報も出ました。アナウンサーが「逃げて！」と絶叫しています。・・・

一瞬にして十三年前の記憶がよみがえりました。浅川中学校で教頭をしていた時、卒業式を終え、外は雪がちらついていました。東日本大震災が起こったのです。原発事故が起こり、深夜に多くの人が避難してきました。中学校の体育館を避難所として準備し、夜通し暖房をつけてありったけの座布団や毛布を用意しました。役場職員も必死の形相でした。皆「できない理由」などありませんでした。同じ人間としてできる限りのことをしようと働いたと思います。そして、その次の年にいわき市の石柱小中学校に新任校長として赴任しました。四月十一日に大規模な土砂崩れに見舞われた学校です。この地で自分ができることは何だろう。土砂で押しつぶされた家屋を見ながらそう思いました。

昨年の春から玉川村の教育長となりました。「教育は子どもと地域の未来を作る」という信念で毎日働いています。東日本大震災では、多くの人が誰かのために、自分ができることを考えて行動しました。この度の地震においてもおそらく多くの人が誰かのために行動すると思います。平時においても、自分のためだけではなく、誰かのために、みんなのために何かを頑張ろうとする子どもたちを育てたいと思っています。

「できない理由を探すのではなく、どうすればできるのかを考える」ということばがあります。玉川村では、どのように考え、行動できる子どもたちを地域とともに育てる教育環境を目指したいと思っています。

生きる力を未来のために

石川地区小中学校長協議会長　酒井修三

地区内小中学校一三校、大きな事故も事件もなく、無事新年を迎えることができました。一月九日は前々日の雪と、厳しい寒さの中でしたが、元気に登校してきた児童生徒により、活気が戻ってきました。しかしながら、元日の能登半島地震の報道やニュースを受け、子ども達には動揺も走りました。始業式では各学校においても、各校長より時間を割いて話をしたところです。一刻も早い人命の救助と、ライフラインの復旧を、願うばかりです。

年度当初、猛威を振るった感染症も五類となり、感染症そのものは無くなっていないとは言え、対応には多少の余裕が生まれました。しかし、ここ数年間で失ったものも少なくありません。活動の制限によって生まれた、子ども同士の関係の希薄化は顕著ですし、不登校児童生徒の増は、大きな課題です。今年度は、その失われたピースを探し出し一つ一つはめ込む作業に各学校が追われました。

声高に叫ばれる「個別最適な学び」「協働的な学び」も、子ども同士、教師と家庭とが信頼関係なしでは達成できないものであると再確認した日々です。

三学期は子ども達の、さらなる成長への指導として重要な学期です。見渡せば、世界規模で巻き起こる自然災害、絶えることのない戦争や紛争等、予測不可能な未来は、すでに身近なものとなりました。だからこそ我々は、子ども達に夢を叶える「生きる力」を身につけさせるべく、今後もあの手この手で奔走し続ける決意です。多忙化解消、地区における少子化、教員志願者の激減等々と課題は山積みですが、子ども達の未来のために、校長一三名が一丸となって、地区の教育に邁進する所存です。

ボランティア活動

相樂正弘

退職公務員連盟と退職校長会の共催によるボランティア活動を四年ぶりに実施しました。新型コロナへの対応が五類扱いとなりましたが、高齢者施設では、外部の人間の出入りに制限を設けており、雨の場合の屋内作業の受け入れができない状況でした。そのため、天候が気がかりでしたが両日とも天候に恵まれ、外での作業を実施することができました。担当の私自身は初めてのボランティア活動でしたが、参加された方々の多くは、何度も経験された方々で、作業をイメージして草刈り機や鎌などの他、トリマーやブロアーまでも持参される方もいました。

令和六年度は、浅川町の「さざそう」からの開始を予定しておりますので、ご協力をお願いします。

―編集後記―

ご多用の中、快く原稿をお寄せいただいた皆様に、感謝申し上げます。同時に、紙面の関係で原稿の一部および写真掲載を割愛させていただいたことを心からお詫び申し上げます。

館初浩